



さとうきびで結ぶ島の産業と未来

沖縄県・沖縄県立八重山高等学校 2年 大久 勝利

3月、僕は今年も家のさとうきびの収穫を手伝った。自分の背丈ほどもあるさとうきびを父が次々に斧で倒していき、茎に巻き付いている枯葉を鎌でそぎ落しながら集め、束ねて持ち運ぶ。いつもなら、ここまでの作業だが今年はなぜか続きがあった。

収穫したさとうきびを一本一本きれいに洗い、搾汁機で搾っていく。その汁を煮詰めて黒糖を作るためだ。母が自分で栽培したさとうきびから黒糖や黒蜜を作り、それをお土産として売りたいというのだ。果たして、そんなことが実現可能なのか？

20年前、県外から石垣島の父のもとに嫁いだ母は、さとうきびの風景にとっても感動したという。そのため、石垣島のさとうきび産業がもっと発展するようにと僕が1歳の頃、黒糖に携わる仕事を始めた。

あくまでも子育て優先だったため、あまり拡大しなかったが、黒糖を大切に和紙で包んだ母のお土産は沖縄の世界遺産施設でも販売され、沖縄ブームの最盛期にはかなり売っていたようだ。幼い頃、いつも夜遅くまで包装作業をしていた母の姿が思い起こされる。

だが最近では、競合品が多くなりなかなか厳しい状況になっているという。そこで3年前に沖縄本島から父の故郷、石垣島に引っ越してきたのを機に、自分で栽培したさとうきびでオリジナルの黒糖を作ろうと、試行錯誤しているのだ。

姉の大学進学にあわせて一昨年からは別の仕事も増やし、二足のわらじ生活を続けている。なぜそこまで？毎日、朝から晩まで働き、休みの日には黒糖の仕事をする母に、「ちょっと無理しすぎじゃない？もうお土産の仕事やめたら？」とつい、言ってしまった。

「でも、夢がないと楽しくないから。この仕事はお母さんのライフワーク。可能な限り続けたい。」と母はにっこり、ほほ笑んだ。

もともと我が家は祖父の代はさとうきび専業農家だったという。祖父と祖母と一緒に過酷な農作業に精を出し、末っ子の父を含む8人の子どもを育て上げた。

あまり知られていないが、実は石垣島では黒糖は作られていない。製造しているのは波照間島・与那国島・西表島などをはじめとする沖縄の小さな離島の8工場のみだ。

石垣島は国内産の砂糖を確保するため国が農家に交付金を支給し、その生活を支えている。本来なら1トンあたりの原料代がわずか約5,500円のところを交付金約1万6,000円を上乗せし、約2万1,500円とし、さとうきび農家の手取りを大幅に引き上げている。

石垣島で製造していない黒糖をなぜ、作ろうとするのか？その場合は、交付金は得られない。厳しい農作業と収穫後の様々な工程。採算が合うのかを計算すればする程、厳しそうだ。それでも母の夢に興味を持った僕は農協や市役所に行き調べてみることにした。

調べてみて驚いたのだが、さとうきびは沖縄県の農家の約8割、全ての耕地面積の約5割で栽培されているそうだ。県内の製糖企業や運送業、金融業など関連する産業への波及効果も高く、沖縄県にとってとても重要な作物なのだというのだ。特に、離島地域では製糖を通じた雇用機会の確保など大変大きな役割を果たしているという。

近年では、さとうきびを利用した新しいエネルギー資源であるバイオエタノールの研究開発や地球温暖化を抑制するため、高い光合成速度を誇るさとうきびの環境保全の可能性が世界からも注目されている。

さらに、栄養豊富なさとうきびの搾りかす「バガス」は製紙用パルプの原料にもなる他、農地へ還元されることで地力の衰えを防ぎ、農作物の再生産を可能にするという。

僕はこれまで自分にとってあまりにも身近で気にもとめてこなかった「さとうきび」がこんなに様々な可能性を秘めている作物だということに驚いた。同時に、さとうきびの特性を最大限に引き出していく知恵を出せば、利益を安定して出せるしくみが作り出せるかもしれないと希望が湧いてきた。

まず、さとうきび農家としては、付加価値の高いさとうきびを作ることを1番の目標とするべきだと思う。化学肥料を極力使わない有機農法や無農薬農業

の技術を確立できれば、そのさとうきびで作った黒糖も付加価値が高まり高値で販売できるようになるだろう。

だが、有機肥料で栽培するには、化学肥料よりも色々なコストがかかってくるに違いない。そうしたなか、どのように利益を出していくのか。

コストを下げるためには、無料のもの、もしくは要らなくなったものを再利用するのが確実だと思う。例えば、家の畑の近くには牛舎が沢山あるが、そこで廃棄される牛糞^{ふん}を畑に肥料として使っている農家が多いと聞いた。

また、バガスを畑にまけば、とてもよい肥料になるという。黒糖を煮詰める時のガス代も高くつくが、バガスを乾燥させればマキ代わりとしても使えそうだ。

近年、限りある資源を効果的に循環活用する資源循環型社会という言葉をよく耳にするが、案外こうした身近なアイデアをつなぎ合わせて色々な産業同士助け合うような流れを作れば実現可能なのかもしれない。

母の黒糖製造も例えば、観光客に農作業やさとうきび搾り体験を提供するなど、さとうきびの他の側面と組み合わせれば、利益の出るしくみが作り出せるかもしれない。

母の夢について調べるうちに、様々な素晴らしい側面について知ることになったさとうきびだが、将来、石垣島の様々な産業が相互に助け合い、共に発展していけるシステムを、さとうきびを通して構築出来たらどんなに素晴らしいことだろう。

そのために今、自分に出来る事からはじめたいと思う。家の畑の有機農法の取り組み、母の黒糖の製造の手伝いをはじめ、もっと国内外の産業にアンテナを張り、各地で取り組まれている様々な施策について学びたい。そして石垣島でも取り組めないか常に考えていきたいと思う。

見慣れたさとうきび畑の風景が未来に向かって輝きはじめた。

